

# 違和感のある日常



## 1. 愛の定義

愛という言葉から何が思い浮かぶだろうか。男女間に生まれる恋愛、親子や兄弟に抱く家族愛、生命に向けられる博愛など様々ある。

LOVE	— 恋愛・性愛 (エロ)	先天的 / 無意識
AFFECTION	— 愛情、友愛 (ストレート、アフタ)	
CHARITY	— 博愛、慈愛 (アガベー)	後天的 / 意識的
ATTACHMENT	— 愛着	後天的 / 無意識

(注) 内は古代ギリシアにおける愛の概念より多いと考えられるもの

愛をそれぞれがもつ特性から4つに分類し、その発生条件から更に3つに分類した。

“LOVE”は異性への愛、“AFFECTION”は家族や親しい人に対する愛で、誰もが生まれながらに持つ、自然発的に芽生える「愛」、“CHARITY”は教えや悟りによって産まれ、自ら習得する「愛」、“ATTACHMENT”は長年の共生や共存によってある時見つけ出されるが、自然と形成される「愛」とと言える。

ここで着目したいのは、“ATTACHMENT”つまり愛着である。愛着は生まれながらには持ち得ないが、他者(物)の影響によって無意識的に生み出される唯一の愛と言えるだろう。

私たちは建築という他者によって愛に気づく家を設計する。

## 2. 愛着と愛着障害



「愛着障害」という言葉がある。  
愛を受けられずに育った為に、愛を理解・認識しづらくなってしまうことで引き起こる精神状態のことと言う。(脱抑制型愛着障害)

実は“私たち”的日常にも愛着障害に近いと感じる状況がある。それは単調な生活の繰り返しで、「愛」を見出しづらくなり日々の生活を“つまらない”と感じてしまうことだ。

単調な生活の要因の一つに“住空間”があると言えるだろう。



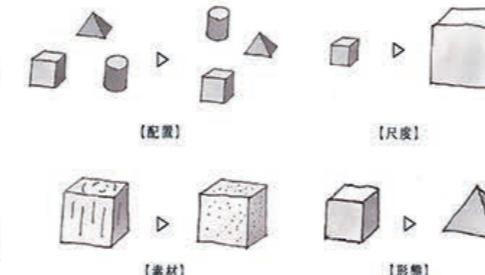
私たちが暮らす“1K”は使い易さや合理性によって定型化され、快適な生活を私たちに提供してくれる。一方でその生活には何の疑問ももたず、決まり切った使われ方をしていると考える。

そこで、「住空間」に少しの「違和感」を与えることで、日々の生活に変化を生み出す提案を行う。

## 3. 空間への違和感

「違和感」とは「しっくりこない感じ」である。つまり「しっくりきている」状態は“定型通りの生活”であると言える。それは、在るべきものが在るべき場所に、在るべき姿、形、大きさで存在し、何の疑問も持たずに生活していることだ。

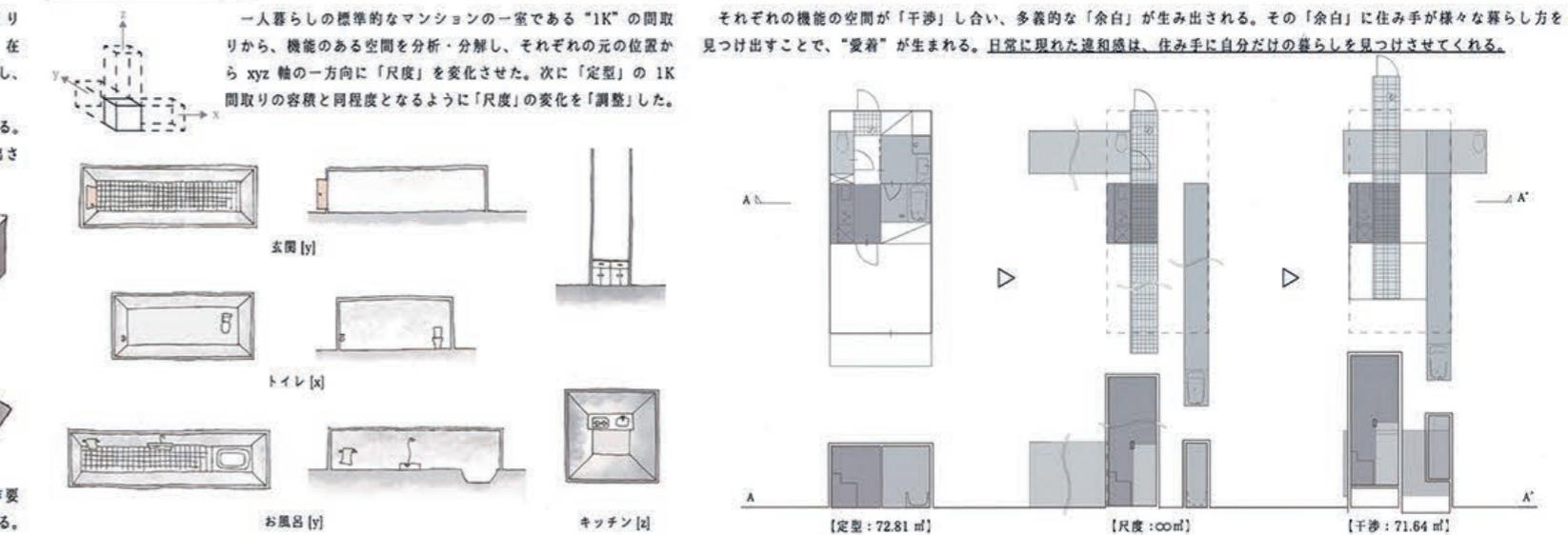
それを少し崩すことで、生活にちょっとした「違和感」が生まれる。定型は「配置」、「尺度」、「形態」、「素材」の4つの要素で生み出されていると考えた。



別物になると「違和感」からはかけ離れてしまったために、操作要素を「尺度」に限定し残りの要素は「尺度」の変化に伴って「調整」する。

## 4. スケールの適応

一人暮らしの標準的なマンションの一室である“1K”的間取りから、機能のある空間を分析・分解し、それぞれの元の位置からxyz軸の一方に向いて「尺度」を変化させた。次に「定型」の1K間取りの容積と同程度となるように「尺度」の変化を「調整」した。



## 5. 構成

それぞれの機能の空間が「干渉」し合い、多義的な「余白」が生み出される。その「余白」に住み手が様々な暮らし方を見つけ出することで、「愛着」が生まれる。日常に現れた違和感は、住み手に自分だけの暮らしを見つけさせてくれる。